

附属学校園の近況

附属学校部長 石川 宏

いま国立大学は統合再編も含めての「構造改革」の真っただ中にあります。附属学校は大学に附属する組織であり、とうぜん大学改革の影響を受けます。その意味で「在り方懇」（正式には「国立の教員養成系大学・学部」の在り方に関する懇談会）が昨年の一月に出した報告書の内容に、すべての附属関係者が注目しました。この報告書では「非教員養成系大学・学部」の附属学校についてこう書かれています。「これらの附属学校は、実験的、先導的な教育課題への対応等、国立の附属学校として取り組むことが必要で、当該大学として教育研究上真に必要とされる場合は、存続させることが適当であるが、その必要性が認められない場合は、段階的に地方移管や廃止の方向で検討することが適当である。」言い換えれば、本学のような非教員養成系大学の附属学校の場合、学部・大学院が附属をフィールドにしてどんな教育研究を行うのか、それが国立大学に求められる課題であるのかどうか。それらの検証の後で、附属学校園の今後の存否が決められるということです。本学では、学部・大学院と附属の間に、従来かなりの相互交流があります。とはいえ、附属四校園が今後も存続するためには、相互の連携をさらに強化しなければなりませんし、そのことによる教育研究上の成果をもっともっと目に見えるかたちで社会にアピールして行く必要があります。

以下は、これと無関係なニュースです。昨年「同時多発テロ事件」のあと、附属中学校では社会科学の時間にこれを取り上げ、生徒たちが大いに議論しました。その

結果を首相官邸にメールで送ったところ、思いがけなく小泉総理から返信が届いた（一月九日付け）とのこと。若い世代の率直な意見を知らせてもらったことのお礼とテロと戦う政府の決意、それに生徒たちを激励する言葉が記されていたということです。自主研究をモットーとする附属中学らしい話題ですのでご紹介しました。

新しい教養教育の夜明け コア・クラスター制度始まる

副学長 市古 夏生

平成一四年度より、従来設置されているコア科目以外に、コア・クラスター制度という新しいタイプの教養教育を始めることになりました。学部にてけられている専門教育とは異なる学問分野を核として、色々な専門領域からその核と関連する授業科目を提供してコースを設置するものです。当面は「ジェンダーコース」と「総合環境学コース」の二コースですが、順次コースの増加をはかる予定です。この制度の特徴は

- ①学部や学科を問わずに、学生の自由意志で登録することができます。本学ではあまり開講していない、一六時四〇分〜一八時一〇分の時間帯に授業科目が置かれています。
 - ②登録する学生の資格は、コース内で必修科目含めて5つ以上の科目を履修する強い意志を持つていことが、唯一の条件となります。
 - ③5つ以上の科目を履修した後、卒業時にコース修了証明書を交付します。
- 専門教育以外に、まとまりのある高度な教養教育を受講することは、就職する学生にとっても大学院で研究する学生にとっても、自己の教養や研究の幅を広げ、しかも深化させる役割も果し、極めて有意義なことです。

学内での実施状況を見ながら、なるべく早い時期に外部の方々に開放したいと思えます。

入試情報の提供について 入試課

本学では、入試日程、各入試の実施状況、学生募集要項お茶の水女子大学および同要項等の入手方法な

区分	募集員	志願者数	合格者数
推薦入試	76	348	86
文教育学部	31	156	37
理学学部	24	66	26
生活科学部	21	126	23
第3年次編入学	30	337	42
文教育学部	10	194	16
理学学部	10	57	16
生活科学部	10	86	10

(単位:名)

どの入試情報(本学大学院入試情報も含む)を各種刊行物のほか、インターネット上の本学入試課ホームページでも提供していますので、ご利用ください。《<http://www.sococha.ac.jp>》
なお、平成一四年度入試の実施状況(平成一三年一二月までに終了している入試)は下表のとおりです。

編集後記

建学から数えて一七七年目を迎えた本学は、これまでに経験したことのない様な変革の荒波にもまれていきます。昭和七年に建造された生活科学部本館の裏手には、八階建ての新研究棟を建設中で、キャンパスの様子も次第に様変わりしつつあります。正門脇の大きな看板に記された、「二一世紀、女性が輝くとき」とのキャッチフレーズが学生たちを出迎え、歴史と伝統のなから、新しいお茶の水女子大学の幕開けを促しているようです。本学の最新情報を発信するため、この広報誌が発刊されました。どうぞ、ティーカップを片手に、本学が歩んでいく姿にご注目下さい。(秋)